陸機の書簡

【キーワード】陸機・陸雲・西晋・書簡・六朝漢語

佐藤利行

一

西晋の陸機（二六一～三〇三）といえば、沈約の「宋書謝霊運伝論」（『文選』巻五十）に、

降及元康、潘陸特秀。律異班賈、體変曹王。縟旨星稠、繁文綺合。綴平臺之逸響、采南皮之高韻。遺風餘烈、事極江右。

降りて元康に及ぶや、潘・陸特り秀づ。律は潘・賈に異なり、體は曹王に変ず。縟旨は星のごとく稠く、繁文は綺のごとく合ふ。平臺の逸響を綴り、南皮の高韻を采る。遺風餘烈、事は江左に極まれり。

すなわち、「下って晋の元康年間になると、潘岳と陸機とが、ずばぬけた存在であったが、その調子は班固や賈誼とは異なっており、様式は曹植や王粲とは変わっていて、美しい内容が星のようにちりばめられ、飾りたてた表現があや絹のように織りなされ、平臺に侍った司馬相如のすばらしい響きがつづられ、南皮に遊んだ建安の文人たちの高い調べが奏でられて、前代の遺風は、西晋の世において最後の輝きをあげた」、と言われるように、潘岳と並んで西晋時代を代表する文人であった。

その陸機が弟の陸雲に宛てた書簡をはじめ、幾つかのものが史書や類書の中に残されている。今回は、それらの書簡を取り上げ、その内容について検討を加えた。

二

以下、陸機の書簡として史書や類書に残されているもの十二首を取り上げて、その内容を考察してみたい。

①「与弟雲書」（其一）

此間有傖父、欲作三都賦。須有成、当以覆酒甕耳。

【書き下し文】

此の間に傖父有り、「三都の賦」を作らんと欲す。其の成るを須ちて、当に以て酒甕を覆ふべきのみ。

【口語訳】

こちらでは田舎者が「三都の賦」を作っているそうだ。それが出来上がったら、酒甕を覆う蓋にしてやろう。

【語釈】

・此間－ここでは洛陽を指す。

・傖父－田舎者。

・三都賦－「三都」とは、蜀都・呉都・魏都をいう。左思の「三都賦」は『文選』巻四に収められている。その序には次のようにある。

余既思摹二京而賦三都、其山川城邑、則稽之地図、其鳥獸草木、則験之方志、風謡歌舞、各附其俗、魁梧長者、莫非其旧。

余　既に二京を摹して三都を賦せんことを思ひ、其の山川城邑は、則ち之を地図に稽へ、其の鳥獸草木は、則ち之を方志に験へ、風謡歌舞は、各おの其の俗に附き、魁梧長者は、其の旧に非ざる莫し。

＊この書簡は『晋書』巻九十二「左思伝」の中に見えるものである。今、「左思伝」の此の書簡が見える前後の部分をも含めて見てみよう（注①）。

二

初、陸機入洛、欲為此賦。聞思作之、撫掌而笑、与弟雲書曰、「此間有傖父、欲作三都賦。須有成、当以覆酒甕耳。」及思賦出、機絶歎伏、以為不能加也、遂輟筆焉。

初め、陸機　洛に入るや、此の賦を為らんと欲す。思の之を作るを聞き、掌を撫ちて笑ひ、弟の雲に書を与へて曰く、「此の間に傖父有り、『三都の賦』を作らんと欲す。其の成るを須ちて、当に以て酒甕を覆ふべきのみ」と。思の賦の出づるに及び、機は絶だ歎伏し、以て加ふること能はずと為して、遂に筆を輟く。

つまり、その初め、陸機が洛陽に入ると、「三都の賦」を作ろうと考えていた。左思が賦を作っていると聞いて、手を打って笑い、弟の陸雲に書簡を送って言った、というその書簡である。どうせたいした作品は出来ないであろうと思っていた陸機であったが、左思の賦が完成すると、機は非常に感心し、手を加えることができないと思い、そのまま筆を措いてしまった、というのである。

②「与弟雲書」（其二）

聽訟観東、作百丈許廊屋。

【書き下し文】

聽訟観の東、百丈許りの廊屋を作る。

【口語訳】

聴訟観の東に、百丈ほどの廊屋を作った。

【語釈】

・聴訟観－「観」は、うてな。「聴訟」は、訴えを聴くこと。ここでは、うてなの名。この語は、古くは『論語』顔淵篇に「子曰、聴訟吾猶人也。必也使無訟乎」（子曰く、訟へを聴くは、吾猶ほ人のごとし。必ずや訟へ無からしめんか）とある。

・百丈許－「丈」は、長さの単位。一丈は十尺。「許」は、ばかり。

・廊屋－廊下のこと。

＊この書簡は『太平御覧』巻一八五・居処部十三「廊」に、「陸機与弟雲書曰」として収められているもの。金濤声点校『陸機集』（『中国古典文学基本叢書』中華書局）補遺では、「聴訟観東、作百丈廊屋」となっており、「許」字を欠く。

③「与弟雲書」（其三）

仁寿殿前、有大方銅鏡。高五尺餘、広三尺二寸、立着庭中。向之便写人、形體了了、亦怪也。

【書き下し文】

仁寿殿の前に、大方の銅鏡有り。高さ五尺餘、広さ三尺二寸、立てて庭中に着く。之に向かひて便ち人を写せば、形體了了として、亦た怪なるなり。

【口語訳】

仁寿殿の前に、大きな四角の銅鏡がある。高さは五尺あまり、広さは三尺二寸で、庭の中に立ててある。これに向かって人を写すと、身体がはっきりと見えるのは、また不思議なことである。

【語釈】

・仁寿殿－宮殿の名。「仁寿」の語は、『論語』雍也篇に「子曰、知者楽水、仁者楽山。知者動、仁者静。知者楽、仁者寿」（子曰く、知者は水を楽しみ、仁者は山を楽しむ。知者は動き、仁者は静かなり。知者は楽しみ、仁者は寿し）とあるのに拠る。

・大方銅鏡－大きな四角の銅鏡。「大方」の語は、『老子』第四十二章に「大方無隅、大器晩成。大音希声、天象無形」（大方は隅無く、大器は晩成す。大音は希声、天象 形無し）と見える。

・広－ここでは横幅をいう。

・了了－了然。はっきりとしたさま。

＊この書簡は『太平御覧』巻七一七・服用部十九「鏡」に、「陸機与弟雲書曰」として収められている。金濤声点校『陸機集』補遺では、「形」下の「體」字を欠く。

④「与弟雲書」（其四）

監徒武庫建始殿諸房中、見有両足猴。真怪物也。

【書き下し文】

監徒・武庫・建始殿の諸房中に、両足の猴有るを見る。真に怪物なり。

【口語訳】

監房・武器庫・建始殿などの建物の中で、二本足の猴（さる）が現れた。本当に不思議なものである。

【語釈】

・監徒－徒刑者を監督する建物。
・武庫－武器庫。
・建始殿－宮殿の名。
・猴－さる。

＊この書簡は『太平御覧』巻九一〇・獣部二十二「猴」に、「陸機与弟雲書曰」として収められている。

⑤「与弟雲書」（其五）

天淵池養山雞。甚可嬉。

【書き下し文】

天淵池に山雞を養ふ。甚だ嬉（よろこ）ぶ可（べ）し。

【口語訳】

天淵池では山雞を飼っています。とても嬉しいことである。

【語釈】

・天淵池－池の名。河南省洛陽県の東にある。『三国志』魏書・文帝紀に「是歳、穿天淵池」（是の歳、天淵池を穿つ）と見える。「是歳」とは、黄初五年のこと。天淵池は、別名を天泉池ともいう。『晋書』巻二十一「志第十一」礼下に「陸機云、天泉池南石溝、引御溝水。池西積石為禊堂」（陸機云ふ、天泉池の南の石溝、御溝の水を引く。池の西 石を積みて禊堂と為す、と）とある。
・山雞－鳥の名。雉の一種で羽が非常に美しい。

＊この書簡は『太平御覧』巻九一八・羽族部五「雞」に、「陸機与弟書曰」として収められている。

⑥「与弟雲書」（其六）

天淵池東南角有果、各作一林。無処不有、縦横成行。一果之間、輒作一堂。

【書き下し文】

天淵池の東南の角に果有り、各おの一林を作（な）す。処として有らざるは無く、縦横 行を成す。一果の間、輒（すなは）ち一堂を作す。

【口語訳】

天淵池の東南の角には果樹があり、それぞれ林をなしている。どこにでもあって、縦横に列をなしている。果樹の間には、建物がある。

【語釈】

・天淵池－池の名。前条の注を見よ。

・果－果樹。

・堂－建物。

＊この書簡は『太平御覧』巻九六四・果部一「果」に、「陸機与弟書曰」として収められている。

⑦「与弟雲書」（其七）

張騫為漢使外国十八年、得塗林安石榴也。

【書き下し文】

張騫（ちょうけん）　漢の為に外国に使ひすること十八年、塗林の安石榴を得たるなり。

【口語訳】

張騫は漢ために外国に使いすること十八年、塗林国の安石榴を持ち帰ったのである。

【語釈】

・張騫－漢の武帝の時、使者として匈奴を経て大月氏に至った。『漢書』巻六一に伝がある。

・塗林－国の名。

・安石榴－石榴の一種。

＊この書簡は『太平御覧』巻九七〇・果部七「石榴」に、「陸機与弟雲書曰」として収められている。

⑧「与弟雲書」（其八）

門有三層、高百尺、魏明帝造。門内東側際城、有魏文帝所起景陽山。餘基尚存。

【書き下し文】

門に三層有り、高さ百尺、魏の明帝 造る。門の内 東側は城に際（いた）り、魏の文帝の起こす所の景陽山有り。餘基は尚ほ存す。

【口語訳】

門は三層になっており、その高さは百尺、魏の明帝が造営したものである。門の中は、東側が城壁まで続いており、魏の文帝が築いた景陽山がある。その他の建物もまだ残っている。

【語釈】

・百尺－「尺」は長さの単位。

・魏明帝－三国時代、魏の天子、曹叡。文帝の子。

・景陽山－山の名。或いは宮殿の名か。

・魏文帝－三国時代、魏の天子、曹丕。二二〇～二二六在位。

＊この書簡は『水経注』巻七「穀水」に、「陸機与弟書曰」として収められている。

⑨「与弟雲書」（其九）

思苦生疾。

【書き下し文】

思ひは苦しく疾ひを生ぜんとす。

【口語訳】

思いは苦しくて病気になりそうである。

＊この書簡は『文選』巻十七・陸機「文賦」の「理翳翳而愈伏、思乙乙其若抽」（理は翳翳として愈よ伏くし、思ひは乙乙として其れ抽づるが若し）の李善注に「士衡与弟書曰」として載せられている。

⑩「与長沙夫人書」

士璜亡。恨一襦少。便以機新襦衣与之。

【書き下し文】

士璜亡す。恨むらくは一襦の少くるを。便ち機の新たなる襦衣を以て之に与ふ。

【口語訳】

（陸）士璜が亡くなりました。可哀想に一枚の襦袢もありませんでした。そこでわたしの新しい襦袢を与えました。

【語釈】

・長沙夫人－陸士璜の夫人であろう。

・士璜－陸機の従叔弟にあたる人。「士璜」はその字であろう。

・襦（衣）－胴着。暖を取るための短い衣。

＊この書簡は『太平御覧』巻六九五・服章部十二「襦」に、「陸機与長沙夫人書曰」として収められている。

⑪「与長沙顧母書」

痛心抜脳、有如孔懐。

【書き下し文】

心を痛め脳を抜くこと、孔懐の如きこと有り。

【口語訳】

心を痛めるあまりに心は空っぽになったが、（まさにこれは）骨肉を分けた兄弟の情である。

【語釈】

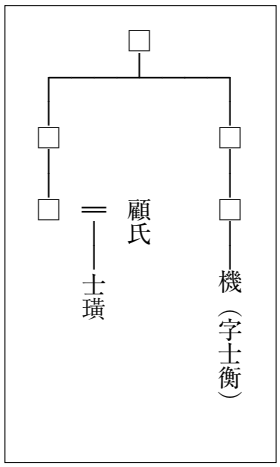
・抜脳－心が空っぽになること。

・孔懐－兄弟同士の親身の情愛をいう。この語は『詩経』小雅・常棣に「死喪之威、兄弟孔懐」（死喪の威、兄弟孔だ懐ふ）とある。

＊この書簡は『顔氏家訓』文章篇に「陸機与長沙顧母書」として載せられている。また同じく『顔氏家訓』風操篇には「陸機集有『長沙顧母書』、乃其従母也」（陸機の集に「長沙顧母の書」有り、乃

ち其の従母なり）とあって、同じ手紙のことが述べられている。今、参考までに『世説新語・顔氏家訓』中国古典文学大系９（平凡社）の注を引用すれば、以下のようである。

『家訓』文章編に、同じこの手紙のことが述べられているが、それによると、手紙文の内容は従祖弟（またいとこ）士璜の死を悼んだものである。系図を示すと左の如くである。だから原文では顧氏を従叔母、つまり従叔父（父より年下の父のいとこ）の妻と言っているのである。



⑫「平復帖」

彦先羸瘵、恐難平復。往属初病、慮不止此、此已為慶。承使唯男。幸為復失前憂耳。呉子楊往初来至、吾不能尽。臨西復来、威儀詳跱、挙動成観、自軀體之美也。思識□愛之邁前、勢所恒有。宜□称之。夏伯栄寇乱之際、聞問不悉。

【書き下し文】

彦先　羸瘵し、平復し難きを恐る。往に初めて病むに属ぶや、此に止まらざるを慮ふれば、此に已て慶と為す。承るに唯男を使ひとすと。幸ひに為に復た前憂を失ふ耳。呉子楊　往に初めて来至るや、吾は尽くすこと能はず。西するに臨みて復た来たるに、威儀　詳く跱はり、挙動　観を成し、自ら軀體の美ある也。思識□愛の邁前なる、勢ひの恒に有する所なり。宜しく之を□称すべし。夏伯栄は寇乱の際なれば、聞問　悉されず。

【口語訳】

彦先は（病気で）衰弱し、回復するのが難しいのではないかと心配でした。先に病気になったときは、このままではすまないであろうと憂慮しておりましたので、この度は誠にうれしいことです。唯男を使いにされたとのこと。幸いなことに以前の心配はなくなりました。呉子楊は、この前はじめてやって来ましたが、私は十分に（相手が）できませんでした。西に行くにあたり、また来ましたが、威儀が備わっており、立ち居振る舞いも目を見張るものがあり、それはおのずから身にそなわった美しさであります。考え方や（　）の積極性は、勢いのある者が常に持っているものです。どうか彼を守り立ててやって下さい。夏伯栄は、寇乱の時であるので、連絡が十分ではありません。

【語釈】

・彦先－顧栄の字。『晋書』巻六十八に伝がある。

・平復－病気が治ること。
・唯男－人名。
・呉子楊－人名。
・夏伯栄－人名。先の「唯男」「呉子楊」とともに、誰を指すのか未詳。
・聞問－音信。便り。

＊この書簡は「平復帖」と呼ばれ（注②）、陸機の真跡として今日に伝えられているものである。「平復帖」は、『宣和書譜』巻十四の陸機「章草」の目に挙げられており、早くから陸機の書跡であると伝えられていた。『宣和書譜』とは、宋の徽宗の内府に収蔵されていた書跡の、いわば目録である。そこには陸機の章草として「平復帖」を、また行書として「望想帖」を挙げている。

徽宗の内府に収蔵されていた陸機の「平復帖」は、やがて御府から流出し、明の韓世能（字は存良）、その子の韓逢禧（朝延と号す）、朝延の友人の張丑らの収蔵を経て、清の梁清標（字は玉立）、安岐らの手に渡り、乾隆四十二年（一七七七）には成親王府に入ったが、再び民間に流出し、一九五六年、張伯駒が政府に献納し、今日では北京の故宮博物院に収蔵されている（注③）。

ここでは『陸機集』（中国古典文学基本叢書）に収める啓功氏の釈文によった。

三

以上、今回は陸機の書簡として弟の陸雲に宛てたもの九首、長沙夫人に宛てたもの一首、長沙の顧母に宛てたもの一首、それに親しい人への書簡と思われる「平復帖」一首、合わせて十二首のものを取り上げてその内容を検討した。当時の書簡としては、例えば陸機の一歳違いの弟陸雲の書簡が、数多く残されている（注④）。先に取り上げた陸機の「平復帖」に見えた「顧栄」（字は彦先）に関するものを今、見てみよう。

（a）「与兄平原書」其二八

近得洛消息。滕永適去二十日書。彦先訪為驃騎司馬。

近ごろ洛の消息を得たり。滕永 適（たま）たま二十日の書を去（や）る。彦先は訪ねられて驃騎司馬と為ると。

（b）「与張光禄書」其二

顧令文・彦先、毎宣隆眷、彌泰之恵。

顧令文・彦先には、毎（つね）に隆眷を宣（の）べられ、彌泰の恵みあり。

（C）「与楊彦明書」其一

雲白。欽明去書不悉。彦先来得書、以為慰。

雲白す。欽明 書を去（や）るも悉（つく）さず。彦先 来たりて書を得、以て慰

めと為す。

（d）「与楊彦明書」其五

輒便絶意。彦先所一二。

輒便（すなは）ち意を絶つ。彦先の一二する所ならん。

これらの書簡からも分かるように、当時の文人達は日常の生活の中で、「書」（書簡）という手段を用いて連絡を取り合っていたようである。それは文学の文体（ジャンル）としての「書」とは違って、主に個人的な内容のものであって、そこに用いられている語彙も、いわば当時の口語体である。「与弟雲書」其の一に見える「傖父」、「与弟雲書」其三の「立着」「了了」、「与長沙顧母書」の「抜脳」などは、当時の口語系の語彙だと思われ、六朝漢語研究の上からも貴重な資料といえる。

今後さらに文献資料を精査し、陸機はもとより、当時の文人達が残した書簡を調査し検討を加えていきたい。

注

（1）佐藤利行「六朝文人伝－左思（『晋書』）－」を参照。

（2）佐藤利行「陸機『平復帖』考」（『国語国文論集』第二十四号・安田女子大学日本文学会）を参照。

（3）この間の流伝の経緯については、王世襄氏の「西晋陸機平復帖流伝考略」（『文物参考資料』一九五七年第一期）に詳しい。佐藤利行訳（『国語国文論集』第二十二号・安田女子大学日本文学会）を参照。

（4）陸雲の書簡は、兄の陸機に宛てたものが三十五首、その他の人に宛てたものが三十九首残されている。佐藤利行『陸雲研究』（白帝社）を参照。

陆机的书信

佐　藤　利　行

西晋陆机（261 ～ 303）的书信在史书或类书中被保留至今。在《晋书》卷92左思传中的“与弟云书曰”中有“此间有伧夫，欲作三都赋，须有成，当以覆酒翁耳”。此外，在《太平御览》卷185居处部13“廊”中的“陆机与弟云书曰”也可见“听讼观东，作百丈许廊屋”。包括上述书信在内，陆机写给弟弟陆云的信共九封，写给长沙夫人的一封，写给长沙顾母的一封，再加上被认为写给亲友的“平复贴”，一共十二封。在此，将对上述书信进行分析，并对其内容加以考察。